

「季語について」——炬燵で食べる西瓜——

今瀬 一博

「対岸四十周年」の年が明け、先日は水戸で「四十周年記念新年会」が開催されました。結社の不惑の年ですので、行事も多くなりますが、このようなときだからこそ、一人一人が足下を見つめいい作品作りを心掛けることは大事だと思います。その際にも、主宰の言、「現場に立つ」事を心掛け、「自分の感動を自分の言葉で」詠み出す事を意識してほしいと考えております。

そんな中昨春秋に「ウエップ俳句通信」に、「季語について」というテーマで論を寄せる機会がありました。依頼内容は、「時代に合わない季語」「季感が薄れてしまった季語」等々、昨今、季語に関する相談を耳にすることも多いので、「季語や歳時記に対する考え方」について、今感じていることや思っていることを自由に書いてほしいというものでした。私達が句作をする時にも話題に上る大きな問題ですので、以下に本文を紹介します。

(以下掲載文)

今回、「季語や歳時記について、感じていることを自由に書く」機会をいただき思い出したことがあります。

学生の頃、ある冬の日の授業の雑談で、担当教員が、「この間、果物屋に西瓜が並んでいたのです、少し高かったが買って炬燵で食べたんだ。美味しくなかったね。西瓜は炬燵で食べるもんじゃな

い。」という話をしました。四十年前も前の冬の西瓜は、蜜柑や保存の利く林檎などが並ぶ中で、異彩を放っていたのでしよう。「並んでいたの」と言ったので、どうしても西瓜が食べなかったのではなさそうです。もう少し言えば、緑に黒の縞の走った艶やかな西瓜から、瞬時に太陽の照る下で食べた、甘くて涼味溢れる味が浮かび、物珍しさから「つい買ってしまった」のだと思います。

この話では西瓜の味と食べる環境が問題でした。当時は品種改良も進まず、西瓜に塩を振って食べていた頃ですので、冬の温室西瓜の味が今一つということは、容易に想像でき、この話の西瓜は炬燵という環境とともに心に残りました。それから時が経ち、今では冬でもカットされた西瓜が食べられるし、しかも美味しい。

「有季定型」を基本とする俳句の、季語のあり方が問われている時代ですので「炬燵で食べる西瓜」の是非を問われると悩ましいのですが、やはり賛同できません。西瓜は盛夏のイメージがありますが、歳時記では秋季です。昔は立秋を過ぎたあたりが旬だったでしょう。いずれにしても西瓜は、太陽の照る下で食べてこそ涼味を感じますし甘さも増すと思います。黒の縞を走らせた深緑の皮の美しさも一層輝きます。目の前に西瓜がなくても「西瓜」の文字を見ると、涼しい風や蟬の声なども聞こえてきます。やはり「西瓜」は皮の色まで含めて全体を指す言葉であり、季節という大きな背景を纏ってそこに在ると思います。これは、原体験という前提がなければ崩れてしまう考えかも知れませんが、俳人の「旬の西瓜」と「カット西瓜」とは分けたいと思っております。ところでここでもう一つ、最近の果物は季節を外れても美味しいという問題があります。ただこれも、季語としての、歳時記に

載っている「西瓜」にとつて「美味しい」というのは、その色や形や生り具合といった、幾つかの条件の中の一つです。これが旬の西瓜であり、「美味しい」がすべての、消費者の西瓜とは異なるものでしょう。四十年前の冬の西瓜は美味しくなく、旬の西瓜との違いを確認できてむしろ救われたかも知れません。

一方「カット西瓜」のような加工の点から言えば、魚などは現在では切り身で売っていることが多く、旬に詠む場合も、姿形の他、その美味しさを詠むことはあります。ただこの場合も秋刀魚なら秋刀魚、鰹なら鰹がきた喜びや感慨が詠まれ、味だけを問題にはしません。素堂の「目には青葉山ほととぎす初松魚」で、切り身の松魚の美味しさだけを思う人はいないと思います。

こう考えてくると「炬燵で食べる西瓜」の問題を考える際に大切にしたいのは豊かな想像力とします。今更想像力と想像されるかも知れませんが、想像力とは、まだ経験していないことや現実にはないものを頭の中で思い描ける能力です。現在のような季節の実感に乏しい時代、それに伴って季語のあり方などが問われる時代には、この想像力を改めて意識して磨くべきだと思います。

次に歳時記のあり方について雑感を一言。これも基本的な考え方是一緒で、豊かな想像力を駆使することで、季節感の薄れた季語を特定の季節に集録する意義などは説明できます。時代の変化に伴う様々な意見には、この季語は必要か不要か、現実合うか合わないかといった単純な二項対比で論じることが控えています。歳時記の潜在的な可能性に目を向けるのがいいと思っています。

歳時記にも様々な役割があります。まず俳句実作者にとつては、その季語の分類から成り立ち、その背景や季語の本義まで知ることができると、豊富な例句によつて詠み方のヒントや表現の工

夫などを知ることができ、句作の際の必需品です。一方で歳時記は（決して読まれていないとは言えませんが）俳句を詠まない人が読んでも大変興味深く面白いものです。これを使えば教科書以外の俳句作品に触れたことのない人も、俳句を理解しながら幅広い作品に親しむことができます。俳句を詠まない人にとつては句集自体手に入りづらく、何を読めばいいのかわからない今の状況を考えれば、俳句を知るための恰好の入門書になります。更に、膨大な研究成果や記録を集めた歳時記は、人文・自然系の辞典や古語辞典に近い役割も果たすことができます。

特にこの「読み物としての歳時記」事典としての歳時記の可能性については、もう少し緩やかに考えることで、日本の文化的遺産である歳時記や、そこに集められた膨大な季語の魅力に迫れるのではないのでしょうか。具体的には、「読み物」としての魅力を前面に押し出した歳時記などが作れないものかということも考えます。また歳時記の基本構成の変更などは、時代に応じてあっても良いのかもしれませんが。伝統文化としての俳句と歳時記に最大限の配慮をしつつ、時代にあった「親しみ方」の工夫はあつてしかるべきだと思います。

新しい工夫を凝らしつつ、新しい時代の中で季語や歳時記の可能性を広げていく。その際にも欠かせないのは、豊かな想像力とします。そしてこの想像力をさらに磨き上げていくために有効なのは、やはり現場に立つての俳句の実作でしょう。豊かな想像力を養っていくことで、「炬燵で食べる西瓜」には、また違った魅力があることに気付くのもかもしれません。

「ウエップ149号 季語について」より